

Title	東京経済大学「学習センター」を訪問して
Author(s)	鈴木, 幸
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.1, 2013.9 : 5-7
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4595
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

東京経済大学「学習センター」を訪問して

鈴木 幸

はじめに

聖学院大学において本年度（2013年4月）より1号館1階にラーニングcommonsが設置され、同時にラーニングセンターも同じフロアに移設された。これによって、トータルに学生の学修支援を行うための枠組みが整ったが、それらをいかに連動させて有機的に機能させるかは今後の課題であると言える。そこで2013年5月15日（水）、両機能を同時に展開している先行例である東京経済大学「学習センター」の学生支援部長・野田修氏を訪ね、同大学での学修支援の実践経験を拝聴し、また施設や機器の用い方等を見学させていただいた。この訪問によって得られた見聞を基にして、本学でのそれらのあり方を検討したい。

東京経済大学「学習センター」の活動について

大学のユニバーサル化が進む中、東京経済大学においても資質・能力・知識等の異なる様々な学生を受け入れる状況を踏まえた、「入学から卒業までを通した」総合的な学生支援の取り組みが2004年度から始まった。そして2007年10月より、その体系を具体化した「学習センター」が開設された。同センターは「正課授業」と「課外の学生支援」を補う形で、「TKUベーシック力（10のチカラ）」という独自に掲げる基礎力を学生に身につけさせ



ることができるようにと¹、学生が「気楽に」立ち寄ることができ、「気軽に」相談できることを目標とした、学生・教職員の学びの交流スペースである。

同センターの運営・充実化にあたっては、学務部・学生支援部・図書館の教職員といった大学全体での協働が必要不可欠であり、開設から6年目にあたる今年には、教職員相互での連携の拡大が見られるようになったという。そして「学生に使ってもらおう」ためにも、学生の意見を生かした「学習センター」設計がなされた。学生が望んだ「学習センター」とは、単なる「自習室」でも「たまり場」でもなく、相談事を「聴いてくれる」相手がいる場であったという。

同センター内は三つに分けることができ、それぞれの特徴を生かした活動が行われている。一つ



は「個別相談スペース」であり、教職員と個々に相談することができる。二つ目は講座やイベントが行われる「イベントスペース」である。そこはガラスで仕切られているため、空き時間にはひとりで学習するための静かな空間「ひとりで学習スペース」にもなる。講座やイベントは正課授業とは異なる独自のものであり、昼休みや夕方を利用して開催されている²。そして三つ目は、まわりの人と話をしながら学習することのできる場所「みんなで学習スペース」である。そこにはKIHACHIRO文庫が置かれ³、自由に閲覧することもできる。パソコンの貸し出しも行っている。しかし最大の特徴は、「相談できる人」である教員・職員・大学院生サポーターが「共に」座っている点にあるという。

また、同センターの外廊下には「10のチカラ」をもとに区分けされた新聞の切り抜きを貼った掲示板を設けることで⁴、廊下を通る学生に向けた学びの発信も行っている。そして向かい側にはキャリアセンターがあることから、学生が行き来しやすい環境でもある。

同センターは、授業の教室でも、事務の窓口でもない。しかし、マージナルな位置に身を置くからこそ、押し付けず、寄り添うことができる場所であるという点に、学生への思いやりを感じることができる。

聖学院大学「ラーニングコモンズ」

文頭に記したが、学びのスペースを連動させる件は今後の大きな課題である。しかし、連動以前に、「ラーニングコモンズ」として何ができるのかを考えてみたい。

ラーニングコモンズとは、「大学図書館の新しい空間モデル」である⁵。「コモンズ」がさす意味は「共有空間」であることから、「学習に役立つ図書館」であるとともに、「学習のための協働空間」であることが特徴とされる⁶。そして、紙もデジタルも含むすべての資料を「効果的に利用できる環境」と、「学生の学習を支援する適切なサービス」を提供で

きる環境が「ラーニングコモンズ」の意味に込められている⁷。

東京経済大学を例に見ると、「みんなで学習スペース」にあたる空間が、「ラーニングコモンズ」に相当すると言えるだろう。また、東京経済大学「学習センター」と聖学院大学「ラーニングコモンズ」の共通点は、図書館内にはないという点である。前者はゼミ室やパソコン教室のある建物に位置し、後者は教室棟である1号館1階の出入り口近くに位置している⁸。図書館内に併設されていないということは、「自習だけ」でない学びの空間であること、すなわち数人で集まって話し合いながら学習できる「協働空間」であることを意味している。また両校とも、有効に施設を機能させ、学修効果を高めるための人的支援が置かれていることにも触れておきたい。

では、聖学院大学における「ラーニングコモンズ」では何ができるのだろうか。本大学のキャッチフレーズは「面倒見のよい大学」だけでなく、「入って伸びる大学」である。大学でいう「伸びる」とは、「学ぶ」ことに通じるだろう。そして「学ぶ」とは、近年言われている「アクティブラーニング」が大いに関係してくるといえる。つまり、「学習者中心の教育」のもと⁹、学習者は「能動的な学習への参加」が求められている¹⁰。そして、学生が自ら積極的に学習するためには、それを促すための空間が必要である。そこで、図書館ではない学習の場である「ラーニングコモンズ」の特徴をいかしつつ、「ともに学び合う」ことのできる環境として展開していくためには私たちに何ができるのか、今後の課題として考えていきたい。

1 TOKYO KEIZAI UNIVERSITY, http://www.tku.ac.jp/student_support/gakushu/bp/. 「10のチカラ」とは、①進一層の力、②TKU常識力、③日本語力、④数的思考力、⑤英語基礎力、⑥IT活用力、⑦TKUマナー力、⑧キャリア形成力、⑨調査・分析・理論的思考力、⑩実践的コミュニケーション力、である。

2 講師は教員よりも学生・職員中心であり、英語学習に

関しては外部に委託して行っている。

- 3 大学の創設者である大倉喜八郎にちなんで名付けられた。「読む」よりも「見る」ことで「面白そうなこと」を見つけてもらうことが主眼であるという。
- 4 その日の新聞は学習センター内に置き、翌日に切り抜いて張り出している。「読売KoDoMo新聞」といった絵・写真で視角に訴える新聞等、計6紙を扱っている。
- 5 山内祐平編『学びの空間が大学を変える』ポイックス株式会社、2010年、102頁。
- 6 同上、102-103頁。
- 7 加藤信哉・小山憲司編訳『ラーニングコモンズ 大学図書館の新しいかたち』勁草書房、2012年、i頁。
- 8 両者とも就職課（前者での名称は「キャリアセンター」、後者では「キャリアサポート課」である）の向かいにあることも共通しており、両所間での学生の往来が予測される。
- 9 河合塾編著『「深い学び」につながるアクティブラーニング：全国大学の学科調査報告とカリキュラム設計の課題』東信堂、2013年、6頁。
- 10 文部科学省、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/018/gijiroku/08022508/003.htm.

(すずき・みゆき 聖学院大学基礎総合教育部ポスト・ドクター)